

[武蔵大学]

学生が作った校歌をチャイムに —武蔵大学讃歌—

織戸 光明 学校法人根津育英会武蔵学園 事務局長

1 入学式の出来事から

合唱団による武蔵大学讃歌のコーラスが済んだ途端、本学園の大講堂は大きな拍手の渦に包まれた。2014年度の入学式

でのことである。例年、式次第最後のこの合唱は、讃歌の美しさに心を揺さぶられる。そう感じたのは自分だけではなく、その場にいた新入生や親御さん、来賓の方々も皆同じ思いだったに違いない。感動を他人と共有するという温かな思いを味わったひと時である。

式後の来賓との懇談会で、同窓会会長から「同窓会の集まりで武蔵大学讃歌を歌うと、讃歌自体を知らない卒業生も多い」と苦言を呈された。運動部の強

い大学ではないので、肩を組み校歌を歌って応援する場面と
いうのがない本学ではあるが、クラブ活動の打ち上げでは、
部員がみんなで讃歌を歌うという伝統は続いていた。一般
学生も何かの時に讃歌を口ずさむという雰囲気があればよ
いと願っていた私は、キャンパスに流れるチャイムを武蔵大学
讃歌にしたいという構想を皆に披露したのである。

私のこのアイデアに賛同してくれた当時の学長、また音
楽アプリで試作を繰り返してくれた学生支援センター部
長のI教授のおかげで、展開が予想以上に早く進んだ。

小さな大学ゆえに教員と職員の距離が近いことが功を
奏し、この年の後学期に、ついに武蔵大学讃歌がチャイム
となつて響き渡ったのである。

2 武蔵大学讃歌の誕生秘話

この讃歌は、本学第1回卒業生が経済学部在学中に
『武蔵評論』という冊子に掲載した詩が歌詞のルーツで、
冊子を読んだ音楽部の学生(本学第4回卒業生)がそれ
に曲をつけ、1954年の本学第2回の卒業式に発表さ
れた。

有名な作詞家、作曲家が作られた立派な校歌をお持ち

の大学もある中で、学生自身が武蔵大学での生活の中から、その歌詞や曲に大学への熱い思いを刻んだということには、70年近く経つても、胸の熱くなる思いを強く持つ。

3 愛校心を育む

チャイムを武蔵大学讃歌に変えたという小さな変化に、学生がどれだけ気づいただろうか。当時、特別大きな反響はなかったが、授業の開始・終了を知らせるメロディーは、学生たちの耳の奥底にひっそりと残り続けていると思いたい。クラブやサークル活動で讃歌に馴染みがある学生らが、このメロディーを知らない学生達に教えているという話が私の耳元に入った時には口元が緩んだ。

このチャイムとともに同じ空間を過ごしている学生、教職員共々が日々の暮らしの中で「武蔵大学讃歌」に馴染み、そして、特定のアイデンティティを共有することで、愛校心が醸成されたらという願いがある。チャイムは、その一助となればと思う。4年間という時間をこの緑豊かなキャンパスで過ごし、「ああ、幸福な時間だった」と思ってもらいたい。当時流行した音楽を耳にしたときに過去を振り返ることは誰にでもよくある。大学時代を懐かしむと

きに、もしこのチャイムのメロディーが誰かの頭の中で流れていてくれたら本望である。



[写真] 緑豊かなキャンパスを流れる濯川(すすぎがわ)と武蔵大学讃歌

[龍谷大学]

チャイムにはチャイム以上の意味がある

安食 真城 龍谷大学宗教部課長

1 大学の歴史を刻む チャイム

龍谷大学には380年以上の歴史があり、チャイムも380年以上にわたって絶えることなく時刻や行事を知らせてきた。

本学は、仏教の僧侶養成の学寮(学林)を起源としている。当初は仏教寺院によく見られる雲版うんぱんという雲の形をした板をたたいて時刻を告げていた。雲版は、大宮学舎の本館(重要文化財)に設置されていて、大学で営まれる法要の開始を伝える行事鐘として、現在も使われている。

明治になり、学生や建物が増えてくると、正門の側の高い柱に鐘が取り付けられ、紐を揺らして鳴らすようになる。そのカ

ランコロンの音色は、当時の大学の佇まいと、正門で一礼して入ってくる学生の様子とともに、本学らしさを醸し出していたと言われている。現在、その鐘は使われていないが、本学の歴史を伝える証人となって、今も当時と同じ場所で私たちを見守ってくれている。

1960年、新たに深草学舎が開学し、広いキャンパスにチャイムの音を届けるための放送設備を導入することになった。ところが、当時は既製品しか選択肢がなく、多くの学校で採用されていたウエストミンスターの鐘のメロディが本学でも採用された。現在のチャイムになったのは1978年で、そのメロディは仏教讃歌の「四弘誓願しくげいがん」という曲(小松清作曲)をアレンジしたものだ。全国で吹き荒れた大学紛争の嵐がようやく収まり、教育の復興だけでなく、建学の精神である浄土真宗の精神に根ざした学生の主体性や独自性を育むための方策を検討する中で導入されたものである。

2 チャイムに込めた思い

四弘誓願とは、仏になろうとする菩薩がおこす四つの

誓い。「すべての人を救いたい」、「すべての煩惱をなくしたい」、「すべての真理の教えを学びたい」、「すべての悟りを得たい」という広大な誓いのことである。四弘誓願のチャイムは、自己中心的な見方を離れ、ありのままの真実を見つめ、理想に向かって歩みだす力強い決意であり、本学に学び集う人に建学の精神を自覚してほしい、建学の精神を実践してほしいという思いから採用されたのである。

はじめて龍谷大学のチャイムを聴いた人は、誰もがその厳かなメロディに驚くはずだ。「怖い」、「不気味」と感じる人もいると聞く。ところが、これを毎日、何度も聴いていると、やがてとても落ち着くメロディであることに気がつく。学生たちに感想を聞いてみたところ、「龍谷大学ならではのなあつて思います」、「落ち着いていて私は好きです」という声が多かった。中には「チャイムが1分以上あつて長いので遅刻を免れた!」という声も。龍大生にとってチャイムはとても身近で親しいものなのだ。当初の違和感が、やがて私たちの身体に染み込んで、建学の精神を体現していく心の血液となっていくのである。

ところで、龍谷大学のチャイムは他に2種類あり、朝の最初のチャイムは「朝のうた」(杉崎大愚作詞・末広恭雄

作曲)、一日の最後のチャイムは「夕べのうた」(渡辺千秋作詞・藤井制心作曲)という仏教讃歌が使われている。朝には一日の始まりを喜び自分の務めを果たす気持ちを高揚させ、授業の合間には学びと実践を促し、最後には自らを静かに省みる気持ちにさせてくれるハーモニーとなっている。

耳にも心にも心地よく、人生を潤してくれるメロディ。龍谷大学のチャイムにはチャイム以上の意味がある。



[写真]大宮学舎本館の雲版

[白百合女子大学]

校歌をアレンジしたチャイムの調べ

高山 貞美 白百合女子大学学長

白百合女子大学は、カトリック系の女子大学である。本学の設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会は、17世紀末にフランスの寒村で誕生し、当時の貧しい人々を擁護し、女性や子どもたちの教育に力を注いできた。その活動はやがて世界各地に及び、1878年にはフランスからの3名のスール(修道女)によつて函館に修道院が創設された。その後、東京、盛岡、仙台、八代、神奈川に活動拠点を広げ、1965年に本学が設立され、今年で59年目を迎える。

調布市の緑ヶ丘に位置する本学は、キャンパスに一歩足を踏み入れると、まるで童話の世界に迷い込んでしまったかのような光景が展開する。東京ドームと

ほぼ同じ面積を誇るキャンパスには、さまざまな樹木と草花が植えられ、小鳥や小動物が棲息する、まさに「白百合の森」である。また、レンガ造りのチャペルからは、正午と午後6時にアンジェラスの鐘の音が辺り一面に鳴り渡る。建学以来、知性と感性との調和のとれた教育実践を伝統としてきた本学で、学生たちは恵み豊かな自然の中で、自由のびのびと大学生活を満喫している。

2022年6月29日、本学では授業の開始・終了時のチャイム音を、従来のものから校歌をアレンジしたメロデーに変更した。カトリック教会のカレンダーでは、6月29日は「聖ペトロ 聖パウロ使徒の祝日」であり、本学の創立記念日にあたる。この記念すべき日に、学生が校歌に慣れ親しむ機会を増やし、愛校心の醸成を図ることを目的として、チャイム音の変更に至った。

校歌の歌詞は次のとおりである。

一 清くかんばし白百合の

花を心のわれらがいのち

人の道には咲かせてぞ

神と国とに捧げまつらん

二 聖女ジャンヌがかかげてし

至誠の旗に正義のつるぎ

おみなのためしいこもりたる

いのちのしるし白百合の花

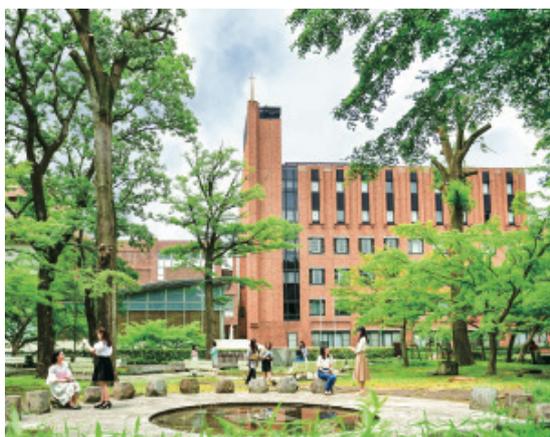
作詞は高名な宗教学者で、文人としても優れた才能を有した姉崎正治（1873～1949）であり、作曲は「春よ来い」「靴が鳴る」「雀の学校」など童謡の作曲家としても知られる弘田龍太郎（1892～1952）である。

歌詞の一番と二番に「白百合の花」が登場する。白百合は、聖母マリアを象徴する花とされ、キリスト教美術ではマリアが天使ガブリエルのお告げを受ける「受胎告知」の場面によく描かれている。清らかで優しく、真の強さを内に秘めた女性を象徴する花と言えよう。

また、歌詞の二番にはジャンヌ・ダルクの名が出てくる。ジャンヌ・ダルクは、英仏百年戦争で祖国を勝利に導いたフランスの国民的英雄で、カトリック教会では「聖女」とされている。彼女は白銀の甲冑を身にまとい、右手に剣、左手にイエスとマリアの名を記した軍旗を掲げ、白馬に乗っ

てオルレアンに進撃し、イギリス軍から解放したとされている。その勇ましさが校歌の一節に謳われている理由として、時代背景は異なるものの、揺るぎない信念を持ち、愛と正義に基づいて神と祖国のために行動した潔さを讃えたものと考えられる。

ところで、本学の校歌は本学だけのものではなく、白百合ファミリイと呼ばれる国内にある姉妹校（幼・小・中・高大）に共通するものである。したがって、チャイム音を変更した後、卒業生が久しぶりにホームカミングした折や、姉妹校の生徒たちが本学を訪問した際に、そのメロディーを耳にすると懐かしさが込みあげ、何とも言えない親しみや一体感を感じるそうである。校歌を歌う機会も入学式や学位記授与式などに限られてしまった現状において、日々流れるチャイムの調べが学生たちの心に帰属意識を促す一助となることを心から期待している。



[写真]キャンパスの風景